

2016.12.1

# 現代俳句千葉

123号

巻頭エッセイ

## ぶらり鎌倉

幹事 上野紫泉



湘南地区の句友と月に一度、四季おりおりの貌を持つ鎌倉の古刹を尋ね吟行句会を楽しんでいる。鎌倉の魅力に引き込まれ、会報は二六五回を数えた。

鶴岡八幡宮へと続く「段葛」は工事も終了、来年の桜の季節を待っている。日蓮上人ゆかりの辻説法跡や安国論寺など見所は多くあるが少し奥に入ると鎌倉独特の谷戸や切通し坂その途中の崖には昔のままの「やぐら」の大きな穴がいくつも見られる。古い墓所である暗く苔生す一帯は腹切りやぐらもあり、もののふの靈気を感じる。北条一族二〇〇名以上がこの場で殉じたと聞く、辛い戦いの場であったのだ。今月の吟行はレトロな江ノ電に乗り相模灘を一望できる長谷寺へと向う。数多くの古刹を有する鎌倉の中でも長谷寺はいつ詣でも風情があり好きなお寺の一つである。ご本尊は十一面観世音菩薩像。三丈三寸にも及ぶ大きな木彫仏で観音霊場の象徴となっている。ふくよかで

紅をおびた艶やかな口もと、かすかな黄金色のお姿に圧倒される。経蔵は回転式で輪転蔵と呼ばれ一回転まわることで一切経すべてを誦した功德が得られると言う。輪廻転生横木をぐいと一回転押しして我が業の因果の結果は。また弁天窟には弘法大師がこの岩窟に参籠し自ら刻まれたといわれている弁才天像があり、現在観音ミュージアムにて体感できる。手入れの行き届いた寺院には、山野草や秋明菊、萩、ほととぎす、彼岸花、本日の目的の十月桜もぼつぼつと咲き

胸うらに点すひとひら十月桜 紫泉  
その先見晴台へと誘われて行く眼下には相模湾の景勝地が待っていた。鎌倉八景のうち「長谷の晩鐘」と謳われその眺望は由比ヶ浜はもとより遠く三浦半島も一望できる。江ノ電沿線藤沢地区のあじさいで有名な極楽寺、腰越は壇ノ浦から凱旋した義経が兄頼朝に鎌倉入りを拒絶された際に滞留した満福寺など江ノ電沿線をのんびりぶらり途中下車もなかなかのもの。面白い発見があり、お奨めします。  
秋うらら撫仏の腹真黒に 紫泉

### 目次

ぶらり鎌倉	上野紫泉	1
秋の吟行会		2~3
諸家近詠		4~6
私の感銘句		7~8
図書紹介		8
津田沼研究句会報告		9
青葉研究句会報告		9~10
柏研究句会報告		10
新会員・会友紹介		10
ひろば		11
会員・会友の近況		12
掲示板		12

千葉県現代俳句協会会報

# 秋の吟行会

## 小江戸「佐原」逍遙

会場 香取市佐原中央公民館 平成二十八年十月三十日(日)



佐原に於いて、地元の坂本正夫氏始め会員各位の御尽力を得、折からしぐれ味の天候をものともせず総勢七十一名参加し吟行・句会を併せて挙行了た。

先ず利根川から大小五つ程の開運橋を横目に中橋、共栄橋と在り上州屋の前に出る。確かこの辺の船着き場の石垣は震災で崩れていた筈と見渡せば、果たして色の違いでそれと判る石段が、間口数間、高さ丈余にわたって修復されていた位で、他に震災の痕跡は見当たらない。外見上は家並に損傷も見ず、先ず先ずの復興振りと拝見。小江戸は健在である。

江戸まさりを標榜する佐原の人々の活力はどの辺に有るのか考えていたら小堀屋本店の前に居た。ここは黒切りそばが名物だとか、その隣の福新呉服店の防火用粘土溜、板戸が自動的に締まる細工は確かに江戸勝りと言えるだろう。ちゅうけい(忠敬)橋に戻ると、樋橋、灌漑用水路で橋の中央から水が流れ落ち小野川に注ぐ別名ジャージャー橋である。



小野川沿いの散策



伊能忠敬旧宅

水利権を持つ伊能忠敬邸はその前にあり、いつも人々の賑わいを見せている。因みに忠敬の測量術と算学は洋式で当時の最先端をゆき、その日本地図の精度に於いて今日の地図と遜色は無いと聞き、江戸どころか正に西洋勝りの人である。このバイタリティーは一体何処からと考えて居たら：あつ、投句時間に間に合わない、疑問は多々あるが次の機会に譲ろう…。

午後一時から開催された句会は四時半盛會裡に終了した。

司会 徳吉洋二郎・木之下みゆき  
披講 羽村美和子・星野一恵・高橋健文  
(矢野忠男記)

〔入賞者作品〕 (二句のうち一句)

今頃は月を歩くか忠敬は

高橋 健文

色づきてわたしを柿と呼ぶ虚空

長井 寛

爽やかや奥に奥ある蔵の店

矢萩ゆたか

新酒酌み「船頭小唄」の斗志・哲郎

奥村 利夫

爽やかや地図の町にて道迷ふ

坂本 正夫

骨太の男の歩幅しぐれ

森村 文子

芒の穂イテすれば水に色

鈴木 肇子

家並は切り絵か冬のしゃぼん玉

富澤ムツ子

小鳥くる佐原ばやしは聞かづとも

岡田 淑子

うす暗き忠敬旧家昼ちちろ

郡 香織

白鳥一羽吾もまた遊び人

田村 隆雄

ジャージャー橋その関を待つ冬帽子

谷本 元子

秋の蛇伊能地図になき道がある

徳吉洋二郎

惜秋や戻す時間もなく小江戸

大見 充子

明り窓とは晩秋の覗き窓

山崎 政江

水音はほんにじゃあじゃあ柿たわわ

高野 春子

しぐるるや地図の翁の記念館

保坂 和郷

蔵ごとに寒さ来ている鳥瞰図

木之下みゆき

音沙汰は未枯れ柳のほかになし

久野 康子

四千万歩の男の一歩いわしぐも

檜垣 梧樓

### 特別選者特選句

(秋尾敏会長 特選)

小江戸晩秋漆喰の壁で待つ

富澤さち子

(渡辺澄副会長 特選)

鳥渡る忠敬像に筆と剣

重田 忠雄

(並木邑人副会長 特選)

惜秋や戻す時間もなく小江戸

大見 充子

(檜垣梧樓副会長 特選)

秋の蛇伊能地図になき道がある

徳吉洋二郎

(高木一恵副会長 特選)

商都佐原天体ときにハロウィーン

諸藤留美子

(塩野谷仁顧問 特選)

新酒酌み「船頭小唄」の斗志・哲郎

奥村 利夫

その他作品 (二句のうち一句、受付順)

大正の栄華の名残り三菱館

菅井 みつ

地球を測る一步万歩や秋時雨

渡辺 澄

百年商家ぞろぞろ秋の耳咲かす

高木 一恵

晩秋といえば水辺を去らぬ犬

並木 邑人

紅葉もゆ白壁土蔵格子窓

塩野谷 仁

身に入むや「この一步から」と遅くない

矢野 忠男

深秋やゆらりゆらりと小舟ゆく

山崎 幸子

山茶花のむこうに招く人がいる

楠見 恵子

深秋の川音もなく流れおり

秋尾 敏

象限儀より天体図小鳥来る

星野 一恵

漆黒の新蕎麦を食む備忘録

坂本 節子

小野川の硬き水面や返り花

上野 紫泉

大利根秋漢めざすは世界地図

岡澤 田鶴

白壁の蔵の街並秋澄める

吉野 精

泡立草抜ければ異次元空間

高橋 勇夫

忠敬の根気と本氣しぐれ来る

羽村美和子

佐原ばやし流る晩秋地図片手

野口 京子

細野 一敏

蝦夷の地へ一步ここより秋曇

横丁に幽かな余熱佐原秋

池田 博臣

白鳥の羽一枚のにごり川

小川トシ子

乗り換へ乗り換へ佐原吟行竹の春

内田 庵茂

地図片手佐原優りや新ばしり

片岡伊つ美

小野川や柳ひそかに冬隣

高橋 博

板塀にのぞき窓あり枯柳

内田 正成

伊能図や息吹き返す秋の翳

市川 唯子

萬紅葉のれん際立つ上州屋

板木 きよ

蔵の道踏切りが鳴る萬紅葉

小林 俊子

秋深む歩幅が語る川の町

末廣 陽恵

行く秋や佐原小唄に任すべし

笈沼 早苗

ひたすらにあるいて寡黙榎檀の実

林 阿愚林

櫓映ゆ地主の顔に測量士

小林 実

江戸まさり奈良屋の跡や草紅葉

香取 白文

遊舟に人影の無く秋深し

香取 政子

小堀屋の新蕎麦喰みて佐原みち

松沢 貞津

提灯にめしと書きおり冬まぢか

齋藤 和子

巻貝のごとく枯葉は小野川へ

増田都美子

昼に鳴く忠敬旧居のちちろ虫

香取 一郎

秋深し手甲脚絆の忠敬翁

高橋 宗史

忠敬の秋に踏み出す一步かな

吉岡 一三

柿紅葉ほかなし忠敬外出中

坂間 恒子

白鳥のおのれ抱きしめ水鏡

林 ゆみ

川は枯芙蓉の傷み聴いており

細根 栞

そぞろ寒むかし小江戸の舟着き場

小門 則子

わらじのひも締める忠敬柿たわわ

野平 久江

◆新春ミニ吟行会◆  
 日時 平成二十九年一月二十二日(日)  
 吟行場所 安房郡鋸南町水仙の里他  
 句会場 鋸南町立中央公民館  
 募集人員 三十名  
 問合せ先 「ミニ吟行会」係 細野一敏  
 TEL・FAX 04339-1551-5375



会場風景



秋尾会長と上位入賞者  
 (左より)  
 秋尾 敏 会長  
 高橋 健 文さん  
 長井 寛 寛さん  
 矢萩 ゆたか さん

## 諸家近詠

小野 裕文

わが死後はゴミとなる本賜の贄  
十代につながる轍蛸草  
脱いだ靴履いて行かれて神の旅  
秋惜しむなげか余ったネジがある  
曼珠沙華女に刃物火の匂い

加倉井允子

極楽へ迫る朝寝のオルゴール  
王国を建てる執念蟻の列  
蝌蚪に足ラストダンスの靴がない  
軍服の父より知らず浮いて来い  
介護者の指の湿りは水中花

尾形ゆきお

人間は他者より成れる日短  
ひとり身やどこか覚めたる春の闇  
ひとりにはひとりがかかる水中花  
嫌われて終わりの生かごきかぶり  
寒鯉も口あく娑婆にひとりかな

片山 依子

寝たきりにならないやうに干鰯噛む  
山からの風ある高さに柿熟るる  
あだ波と心ひとつに浮寝鳥  
来し方の貝殻にある秋の風  
蔓たぐりるるひとりとはこんなもの

清水 伶

からだ中雨の匂いの櫛子の実  
姿見にからだほげせば曼珠沙華  
平安京の虫の闇なら行つてみる  
葛の花もし聲出さば權未知子  
硝子切る静けさにあり蟻地獄

椎名 鳳人

地の底も良夜なるべし樹木葬  
痛風の行きどころなき残暑かな  
曲輪跡なる噴水の乱れざま  
瀧の水落ちゆく無明破りつつ  
初夏や飴切り包丁空叩き

塩野谷 仁

道変えて帰る蜻蛉に見られぬため  
蜻蛉より遠いところを日暮とす  
誰からも遠い時間を木の実降る  
我らみな無頼派くずれ海鼠噛む  
茶が咲いてむかしわれらに擦過傷

佐々木幸子

黒猫に指定席ありソーダ水  
ランナーのすぎたる街の片かげり  
眞昼間の寂光まとう秋の蝶  
パン提げて秋夕焼を見ておりぬ  
人形は振り返らない燕帰る

清水 重陽

山を見て花見て甲斐に育ちをり  
富士よりの川の澄みたる山桜  
自転車降り手花火の客となる  
柿たわわ折れんばかりに枝しなふ  
稲負ひて一日暮るる馬の顔

楠井 収

苺食うずばずぶと人を食う  
孤独死の十年日記薄暑かな  
水際の猫の子きつと口結ぶ母  
訳あり気な離島の医師や麦藁帽  
吊し柿社員に個性あるや無し

泉 志眞子

掛け違う胸のボタンや桜貝  
赤のまま人はそんなに変われない  
国宝をめぐる大和路蟬しぐれ  
ひとり降りる夕蜩の無人駅  
単線の灯りだんだん遠く秋

國武 和子

空港に帰着のメール浦島草  
焦げそうな吾が影みじか灸花  
星飛ぶや排他水域越えて落つ  
ゆさゆさと村がふくらむ秋日和  
おみなめし母似と言われ母知らず

坂間 恒子

初秋のひとすじ受胎告知かな  
トライアングル響く一音蛇の衣  
夕顔のうしろの闇に素手入れる  
マボロシを覗る人に会う蟬しぐれ  
裏山のひぐらし三越から電話

金澤 恵子

初夢や割烹着きた母に逢う  
葬列の五六人なる若葉雨  
枕辺に句集遊ばせ明け易し  
沙羅咲けり戦後を生きてはな子逝く  
明日死ぬと思えばよろし寒の水

小林 実

花火に遠く老人が耐えている  
陽炎に押されたる人転びけり  
捨梁に栃木の雨の降りやまず  
山眠る尿瓶は尿瓶変りなし  
十二月鰭を使つてあるくなり

芝崎 梓

万緑を抜けて死がゆき青こだま  
千年の桜浄土へ尾を垂らす  
ここまで来れば花野の誘いも悪くない  
尊厳死白桃の種が大きい  
雪が降るジャンケンポンの外側で

佐藤 禎子

芒原ヘリの一機は遅れたり  
コンテナの窠れておりぬ芒原  
葛を出てハスキーボイスになっている  
拝礼は石段の下いぼむしり  
いぬほおずき胸突坂にはみだしぬ

口村 洋子

春光の七色纏う宮の鳩  
噴水や真似て広がる児の遊び  
俳句にも理系文系鬼貫忌  
恐竜の眠りを掘れば秋の声  
一本の後ろ万なる野水仙

小張 直子

曼珠沙華神と仏の影法師  
かがやきは鬼女の血まじる紅葉溪  
母の忌の山茶花白くしろく咲く  
あこがれは百歳にあり菊大輪  
名月や鳴り出しそうな父の尺八

楠見 恵子

どうしてもひとり足らない花野かな  
門燈やよこぎったのは秋蝶か  
遠ざかる土耳古行進曲晩夏  
冷房という水槽に居てふたり  
少年工ひとり躑躅を吸う

國分 三徳

渋柿の札ぶら下げてありにけり  
ゴム紐が弛くてごめん墓  
大の字も川の字も好き豊替  
隣家には明日着きます蝸牛  
自問自答してはる蜥蜴の尻尾かな

倉岡 けい

濡れてより真実赤い冬のばら  
絶えず疑問薄い光の枯尾花  
短日の雲の流れが止まる充実  
人生ゲーム枯野に橋を探しおり  
負独楽の傷を少女が手でつつむ

里見 さち

やれるだけやるとキャベツの雪払ふ  
形なきものの壊れて三寒四温  
嘴をあけてるる鶺鴒日和  
笑つてゐる声かも鴉しやぼん玉  
ぶらんこに座りこんな脚あまる

木下 昌子

討ち入りの日の欠席を託ける  
キャンパスの歩幅大きく春立ちぬ  
蛇穴を出でて愛車に静電気  
艶つやと枇杷の大種定年期  
少しずつ傷んで夜の冷房車

佐藤 浩子

蘆の角男峰女峰のうつすらと  
夕空や葡萄若葉に育つ粒  
朝の日に向きて河骨寂かなり  
天皇の讓位の念ひ濃竜胆  
初日影賽を振る子の大まじめ

佐藤 映二

蠟梅や屍のやうな岬山  
ピフテキは荷風クレソンは踊子よ  
夜蛙や出して蔵つてバスポート  
黄鶯の声降る森に逸れけり  
葛根湯効きし夜長のトーマス・マン

黒澤 雅代

一滴に無限の真昼しやぼん玉  
手火花のうしろの正面に月日  
真ん中が見えてなかった大夏野  
胸に潮満つるときあり忍冬咲く  
もの思うこと止めてのち冬の蝶

小出 治重

十月の忌日多きを力とす  
ずぶ濡れの胸を抱へて霧の夜  
青春の日のちろ晩年の大ちろ  
秋冷のひと日は疾し詩逃げて  
学童への苛め許さず秋の雷

佐久間眞城

妻と言う女罷りぬ秋の暮  
行くわよと手を振る妻や冬銀河  
死ぬ程に好きと云われし聖夜かな  
初夢に初恋の人卒寿かな  
傘寿米寿卒寿ずらりと松の内

小池美佐子

実石榴の直系名乗る一区画  
復元の叶わぬ地図に粉雪舞う  
三本のチューリップの差方程式  
追風に乗ったつもりのしんがり蟻  
画用紙の半分は満開秋桜



## 諸家近歌

久保 筑峯

血は未だ大地に流る沖繩忌  
遠き日の野焼きの火炎服で打つ  
未練とはひかがみのこと夜の秋  
冬の蝶白きふくらみ覗きけり  
大クレイン冬のカオスへ突き抜けり

澤田 寿一

花は葉に老の自覚を裏返す  
節分の鬼に優しい車椅子  
自らの明日を探す走馬灯  
この風の行き着くところ糸とんぼ  
故郷の墓は移さずきりたんぼ

荒木 洋子

軍縮という春暁を白孔雀  
サバンナ遠したてがみに桜しべ  
私の噴水しかるべき円を成す  
明けの百合どきどき文学の端っこ  
笑うための光を増せり霜柱

下村 洋子

日の暮の母はいまごろ蕎麦の花  
白桔梗雨月物語より現るる  
芭蕉庵萩見る我も過客なる  
蒲の絮小伝馬町を通りぬけ  
わが影の上に影あり十三夜

佐藤美奈穂

診察を呼ばれて四月の雑誌置く  
赤蜻蛉叫びたいです猫不明  
黄木蓮五メートル程の高さかな  
風よ風木蓮の黄揺るがせて  
山越えて祭の練習今日もある

金田めぐみ

蓑虫の並びて甲と乙の仲  
冬桜一番若き今日という日  
銀漢や小言は後からじんわりと  
おーおーと神の降り来し里祭  
ゆっくりと解けゆく残心秋暑く

倉田たへ子

もうひとりのわたしがいたりサングラス  
紫陽花の後ろの後ろ鬼がおり  
夏帽子夕ぐれ雲を一万歩  
ソプラノの声透き通る梅雨晴間  
落日を掬いあげおり芒原

斉藤すず子

頼る杖ありて朝顔咲き登る  
彼の国の夫に伝言星祭  
捨て甕の底に集まる虫の声  
待つ事も待たれる事も無き夜長  
聞き置いてすぐに忘るる鴟の賛

佐藤美紀江

恋猫や不機嫌そうにシャッター街  
水の音集まり来たる啄木忌  
月見草仕舞いしままの腕時計  
小雨降る夜神楽父の笛の音よ  
強情ばりの兄の植えたる木槿垣

窪田 俊作

地酒一本新米のにぎり飯  
霧のため遅れ出ている腹時計  
無造作に顔置いてある夏帽子  
長廊下失語失笑秋深む  
転た寝の間に枯木になつていた

重田 忠雄

罇徴は神への証鏡餅  
満月の生みおとしたる隠岐の牛  
原爆忌しずかな木からしゃべりだす  
電工の昼餉は地べた花吹雪  
叩かれて打たれて野火の太りけり

坂本 正夫

春一番ローム崇りの赤い風  
晩年や柿若葉にもする嫉妬  
詩心のオートファジーや星月夜  
幸わせはしみじみがよし文化の日  
すぐ鳥を呼んで熟柿の村の皴

内田 正成

澄みし空畑全体や蕎麦の花  
同期会忘れし前の七夕かな  
後期入り登る山寺紅葉映え  
暁の月の地平線地球の出  
鬼灯熟れり吹き鳴らす子供かな

島田 翠松

風もまた風にかるる秋深し  
遊の字の余白小間切れ秋暑し  
無一物即無尽蔵秋間  
赤き血をこころも流す秋真昼  
銀河より届く曲ありポップ・ディラン

近藤 幸子

風起きて萩のみだれを解かしめよ  
噓して話が飛んでしまひけり  
薔薇散れり舞台の終り観る如く  
白木蓮ひかりと傷を持ちにけり  
銀製の匙のくもりや桜桃忌

私の感銘句

伊藤 希眸

	作者名	号頁
冬紅葉去りゆく時間の置手紙	小張 直子	116 2
寒月光ひりひりと田に亀裂	加藤 法子	116 3
星涼し鬱の画数掬い取る	小林 俊子	116 4
向合えば背中が見える初鏡	椎名 鳳人	117 5
後の世に辻もしあらば風船壳	塩野谷 仁	117 5
桃二つ寂しき三つ置いてゆく	白木 暢子	117 6
かたくりの花と住みいて帰らざる	高橋 宗史	117 6
半跣して思惟いや秋思なすことも	檜垣 梧樓	119 10
流山という駅前にある秋の暮	鳴戸 奈菜	119 12
霧の枕木目覚めぬ中に始発出る	野口 京子	119 12
半跣して思惟いや秋思なすことも	檜垣 梧樓	119 12

修行するための座禅法に半跣坐をし無になることを窮極の悟りとする。そんな僧の話を知っているのだが、凡人が半跣しても思惟といいつつ冥想の中に心が動いてしまう。思惟佛などといわれているが、或る僧の話ではまだ途中の仏様と言う。作者も冥想して心鎮めてはいるものの、つい亡き恋妻のことを想い巡らすことに、当然のように秋思の中をさまよう。人間らしく正直な詠み方と深さを感じる。

近江喜代子

日体大卒のごきぶり現わるる	國分 三徳	116 2
断捨離に二章目のあり深む秋	小出貴依子	116 2
風光る保育器の子に名がついて	小野富美子	116 4
失くしたる指芽吹くかに火照りだす	椎名 鳳人	117 5

冬菊が母の匂いとなる日暮	庄司とほる	117 5
これも命あれも命と芽吹きけり	高橋由紀子	118 2
迂闊にも声が年取る寒卵	田中 正恵	118 4
動かねば崩れる象や花の雲	関 千賀子	118 4
数式に恋した娘百舌鳥日和	林 阿恵林	119 9
一釜を塩で握つて今年米	渡邊 竹庵	119 13
数式に恋した娘百舌鳥日和	林 阿恵林	119 13

年頃の娘がどんなに優秀な男性を連れて来ても面白くない父親だが、娘さんが恋した相手は数式だという。所謂「理系女子」の道へ進まれたのでしよう。数学の真理は道なき道の果てに潜んでいるという。婚期も心配になってくる。折しも木の頂では百舌鳥が鋭い声で鳴いている。意志を貫くことは判っている。見守るしかないのだ。内心は誇らしく、エールを送られているのではないでしようか。

金子 未完

蟻の列放射線上異常あり	林 阿恵林	119 9
解決をしないのも知恵ラムネ玉	普川 洋	119 9
雁渡し葬の献花にも序列	根岸 ナツ	119 9
しばらくは生者の行進曼珠沙華	保坂 末子	119 9
夏帽やこの世の友の見舞ひしに	檜垣 梧樓	119 10
この星に言語はいくつ鳥渡る	沼山美津江	119 11
万緑に呑みこまれたる大鳥居	前田 孝子	119 11
露草や命は並べてひとつずつ	鳴戸 奈菜	119 12
運動会ひらがなだけの案内状	原 悦子	119 12
長月の月光菩薩の背の妖し	なかもと淑子	119 12

蟻の列放射線上異常あり

林 阿恵林

放射線と言えば、高エネルギーの電磁波(ガンマ線、X線のことで電磁放射線)の総称であり、レントゲンや電力に使われ、正義の味方善玉であった。ところが、三・一一以降、放射能汚染となり、不義悪玉になってしまった。また蟻の列は子供の頃、夢を与えた。大人になった今は、余りにも現実的で夢など持てない。宇宙に存在する「森羅万象全て、悲しいかな、時代と人によって評価が異なる。時代を捉えた句である。

石井紀美子

穴まどいいつもの道を行きなさい	金澤 恵子	116 2
闇汁の中より秘密保護法案	東 國人	116 3
歯車がはずれ勤労感謝の日	小野 裕文	116 4
花ぐもりとはにわたりの蹲る	塩野谷 仁	117 5
あといくつ穴掘れば足る花曇り	芝崎 梓	117 6
みんなの鳴く日鳴かぬ日また戦後	徳吉洋二郎	118 2
心音の寒きあたりに杭を打つ	下村 洋子	118 3
桐の実の赤きところを忍という	林 ゆみ	119 11
黒葡萄生涯無口な父であり	保坂ミエ子	119 11
誰もいない私もない公園の秋	鳴戸 奈菜	119 12
深緑を潜りて蒼き雲に乗る	小出 治重	116 3
見てくれる筈ふらごを押しやる	加藤 法子	116 3
戦場の匂ひは知らず梅の花	久保さちを	116 3
血圧の折れ線グラフ年惜しむ	棗 楯伊	117 5
水仙の細身が喘ぐボディビル	澤田 寿一	117 6

馬場 馬子

作句とは老いのリハビリいわし雲 高橋由紀子 118 2  
 花曇うかと仮面をはずしけり 高野 礼子 118 4  
 新走り久留里城下の上総掘り 中村 博子 119 10  
 聴くことに始まる介護蓮の花 浜名 儀一 119 11  
 夏逝くやいくさ重ねし不破の関 中嶋 三雄 119 13  
 見てくれる筈ぶらこを押しやる 加藤 法子

公園でしようか、孫と遊びに行かれブランコをこぐ手助けをされている。この先、介護が必要になったら、私の面倒を看てくれると心を通わされている。

最近の少子化問題、特養ホーム入所の困難等々の問題を微塵も感じさせない、ほのぼのとした作品だと思います。

鈴木まんぼう

こおろぎを暗夜行路に誘いこむ 菊地 京子 116 2  
 風花を仏陀の弟子に貰いけり 小林 実 116 2  
 父も石母もまた石木菟が鳴く 加藤 法子 116 3  
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5  
 風花は風の脱け殻愛は哀 芝崎 梓 117 6  
 駅員の白き手袋東風を指す 笹沼 郁夫 117 6  
 ゆく春をサンダル履きの街の角 高橋 健文 118 2  
 みんみの鳴く日鳴かぬ日まだ戦後 徳吉洋二郎 118 2  
 蝶一頭蹄の音のかすかなる 普川 洋 119 9  
 憲法は死にますか今朝路を煮る 並木 邑人 119 11

鈴木 瑩子  
 風花を仏陀の弟子に貰いけり 小林 実 116 2  
 立春寒波母に甲羅のごときもの 植原 安治 116 3

初時雨平等という観覧車 東 國人 116 3  
 米作る人に初日は意志であり 坂本 正夫 116 4  
 晩年や枯野の中がやわらかい 青木 一夫 117 3  
 野遊びや風の視線を引っぱって 山中 葛子 117 4  
 桜貝拾いて軽ろき水の星 松澤 龍一 117 4  
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5  
 みんみの鳴く日鳴かぬ日まだ戦後 徳吉洋二郎 118 2  
 白雲を生み大滝の落ちにけり 高久 清美 118 4  
 風花を仏陀の弟子に貰いけり 小林 実

天からの贈り物、ひらひら舞ってくるその時は妙に嬉しく思います。仏様の弟子から貰う、なんて素敵でしょう。

〈初時雨平等という観覧車 東國人〉の平等というなんと曖昧なことばでしょう。観覧車は地上から上つても、ゆらゆら空中に吊らされています。"初時雨"が効いていると思います。

山中 葛子

わたくしの鬱からころり枇杷の種 菊地 京子 116 2  
 ゆりかもめ無名の手の平にことば 市川 唯子 116 2  
 父の日の母の見ている沖の沖 東 國人 116 3  
 一寸の草水柱にも日のしづく 笹沼 郁夫 117 6  
 九条は宇宙のおもさ天道虫 重田 忠雄 117 6  
 外は梅雨内に激辛焼きカレー 椿 良松 118 2  
 少年に雛のうす闇はずかしき 高木 一恵 118 3  
 仰向けの蟬蟬しぐれ聞いている 羽村美和子 119 10  
 憲法は死にますか今朝路を煮る 並木 邑人 119 11  
 誰もいない私もない公園の秋 鳴戸 奈菜 119 12

図書紹介

■句集『水陽炎』 長井 寛  
 平成二十八年十月十五日 現代俳句協会  
 職退きて干潟のような午後三時  
 逡巡の春を引つ張るSL車  
 白骨の母とふたりの十三夜  
 長井氏は平成二十八年現代俳句協会年度作品賞を受賞されました。おめでとうございます。

◆平成二十九年「私の感銘句」募集◆  
 今号で本年度分の掲載は終わります。七十七名の方に参加いただきました。ご協力有り難うございました。  
 来年度掲載分を募集致しますので同封の用紙で奮ってご応募下さい。

◆平成二十九年度俳句大会◆  
 只今、作品募集中。  
 締切りは、平成二十九年一月三十一日です。お早めにご応募下さるようお願いいたします。  
 会員以外の方も応募できます。  
 定期総会・俳句大会は平成二十九年三月十九日(日)  
 詳細は同封チラシをご覧ください。



津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二九一回(平成二十八年八月九日)

司会 横須賀洋子

生前贈与畑のしろうりしそなすび 佐藤 晏行
一服の毒八月の処方せん 徳吉洋二郎
今生のはしっこにいて梅を干す 岡田 淑子
もしもの問いにオクラの花が咲く 白木 暢子
夜の秋安全ピンが落ちている 楠見 恵子
究極の日焼け左へ巻く旋毛 横須賀洋子
兔の子月から跳ね出て遊泳中 大塚 弘毅
踊るなり有情非情の尻に付き 檜垣 梧樓
蜻蛉群れ浮く自省という高さ 松崎あきら
ひらがなを斜め読みする蟬しぐれ 山中 葛子
明けの雷水面に顔出す大王鳥賊 池田 博臣
立秋や天皇後期高齢者 イザベル真央
電柱のやや傾けたる遠花火 なかもと淑子
黒豹が飛ぶ八月の爆心地 林 阿愚林
終戦日魚肉ソーセージの立つレジ袋 竹中 華那
イヤフォンを咎むる人なし草を刈る 股野 久子
貧乏神疫病神と踊りの輪 小林 実
三日も思考の末に烏瓜の花 金子 未完
炎天に自己失しないし人の行く 吉野 精

●第二九二回(平成二十八年九月十三日)

司会 佐藤 晏行

良夜なりきよし・よしは卒寿を越え 檜垣 梧樓
貝殻を吊しまだある夏時間 岡田 淑子
融通の利かない奴に猫じゃらし 金子 未完
吊皮の鋭角にゆれ9月かな 深山きんぎょ
ため息のわたしの韻律曼珠沙華 山中 葛子
秋風にしかたがないといわれけり 楠見 恵子
みんなのまだ鳴いてゐる遠眼鏡 股野 久子

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第六会議室)

●第六十二回(平成二十八年八月二十五日)

司会 椿 良松

打水の終いのホースがひねくれる 加藤 法子
水浴びのカラス生者の側に来る 小林 実
汗しとどそんなに美女にさせたいか 三須 民恵
吸うと吐くといずれ哀しき金魚かな 並木 邑人
足早の戦争風化鳳仙花 鈴木まんぼう
あさがおや地球の裏から関の声 徳吉洋二郎
抱えきれない渦八月十五日 馬淵 津枝
かなかなの夜明けよ源氏物語 石井紀美子
ふたたびの玉音放送烈日下 矢野 忠男
肩掛けの鞆ゆさゆさ生身魂 細野 一敏
十五日沖へ沖へと西瓜が行く 松崎あきら
日照り雨蟬の木にまた蟬が来る 細根 栗
ちちる鳴く無言で出たり無言館 大塚 弘毅
少年の背中綺麗な汗の筋 椿 良松
ユーラシアの端の島国原爆忌 山崎 幸子
晩年のうしろの正面まんじゅしゃげ 長濱 聰子
白靴履いて父はあの世で再婚せよ 竹中 華那

●第六十三回(平成二十八年九月二十二日)

(於：雨の「向島百花園」浅草) 吟行

瓢箪の己が揺れを持って余す 加藤 法子
玉の井の名残りの蚊かな紅を引く 徳吉洋二郎
雨襖の向う曼珠沙華曼珠沙華 山崎 幸子
粋いき通り来て漂着す秋の雨 長濱 聰子
浅草の粋を抜けたる秋微雨 細野 一敏
蛇瓜の少し紅ある五、六本 小林 実
墨堤やぬれにぞぬるる青ひさご 矢野 忠男
葉末をわたる風に浮遊の秋の蝶 馬淵 津枝

真ん中に嬰兒花野の曼陀羅  
生国という風のあり草の花  
こほろぎや男黙つて皿洗ふ

石井紀美子  
細根 葉  
鈴木まんぼう

(於…千葉市民会館・第六会議室)

●第六十四回(平成二十八年十月二十七日)

司会 長濱 聰子

胡桃割る中よりお伽噺かな  
目力が呼ぶ鱗雲から欠片  
懇ろに縛られている新走り  
茶の花や帰る道なら覚えてる  
行く秋の身に錘鉛を下ろしつつ  
秋の蛇浅草仲見世観音さん  
小利口な青柚子が来て喧しい  
埴輪の目一直線の秋思かな  
いつもとは違う小鳥来て独り  
こよこよ銀河の砦が呼んでいる  
胴乱に馬追いまたしてもミサイル  
蛇穴に十万年を何としよう  
ねこじゃらし鱗のごとき誉め言葉  
少子化の国です木の実多産です  
外出着脱ぎ安堵やマスカット  
秋時雨せまき三和土に色ガラス

馬淵 津枝  
三須 民恵  
小林 実  
細野 一敏  
越野 雄治  
徳吉洋二郎  
加藤 法子  
鈴木まんぼう  
細根 葉  
樁 良松  
長濱 聰子  
並木 邑人  
石井紀美子  
吉野 精  
山崎 幸子  
矢野 忠男

□柏研究句会報告

(於…柏市「ハックルベリー」2階)

●第五十一回(平成二十八年八月六日)

司会 長井 寛

夏草や張り替えてある顔写真  
蟬しぐれ帰らぬひとの忘れ傘  
遠き日の小言の酸味花擬宝珠  
八日目の蟬満ち足る白い雲  
未来とは朝顔の種を取ること  
墳丘の木洩日を縫う黒揚羽

イザベル真央  
伊藤 希眸  
栃木 きよ  
野口 京子  
岡田 春人  
小林 俊子

しがらみを捨ててしまぬ牛膝  
眼の底の二物衝撃という晩夏

下村 洋子  
長井 寛

●第五十二回(平成二十八年九月十日)

司会 岡田 春人

秋蝶の風縫つて来るシャンソン館  
冬瓜煮る核弾頭の地震波図  
二百十日綺麗な眉の漢ども  
問診の白き時間を螻蛄鳴けり  
星雲のごとき水飴秋祭り  
初時雨箱にテレビと電話なし  
日常にもどる速さや秋燕

野口 京子  
佐藤 鈴子  
イザベル真央  
下村 洋子  
長井 寛  
岡田 春人  
栃木 きよ

●第五十三回(平成二十八年十月八日)

司会 岡田 春人

役立たぬ防犯カメラ雁の文  
あこがれは百歳にあり菊大輪  
落葉踏み茶室はすでに隠れ里  
赤い靴いつもお揃いいわし雲  
襟足にレモンの香り通夜の客  
パレードの末端にある秋の雲  
真葛原異界への道秘し持ち  
青栗やマリンバ洩るる山の家  
朝焼けの雲より生まる赤い羽根  
七十路は使いつぱしり文化の日

伊藤 希眸  
小張 直子  
栃木 きよ  
小林 俊子  
松澤 龍一  
野口 京子  
下村 洋子  
佐藤 鈴子  
長井 寛  
岡田 春人

新会員・会友紹介

船橋市本中山 村田黙己春(会員)

(推薦者 関根 曳月)

逆縁のふたそぢあまり寒参  
裸の子画龍点睛おちんちん  
葛飾に夏来にけらし絵馬の風

千葉県稲毛区 松本 千花(会員)  
(推薦者 山中 葛子)

あぢさるは心配性の母の色  
四桁の番号入れよ夕立あと  
でで虫や何かにつけてプレミアム

野田市野田 関谷ひろ子(会友)

(推薦者 秋尾 敏)

地下水の丸い手ざわり盆用意  
自販機だけの商売青唐辛子  
定刻に帰る苦なし夕野分

鎌ヶ谷市鎌ヶ谷 河合 利枝(会員)

(推薦者 宮坂 静生)

遊園地泣く子を隠す木下闇  
埋もれて蝶が生きる夏の砂  
初雪や白無垢脱げば錦なり

船橋市薬円台 滝澤 泰斗(会員)

(推薦者 武田 伸一)

房総を木枯らし暴走して海へ  
三竦みの下に難民冬間近  
香水と汗うすく伸ぶ夜間飛行

市原市国分寺台中央 安田 時空(会員)

(推薦者 武田 和郎)

新緑を依怙鼻肩して伐りにけり  
睡眠を前後に分けて夜長かな  
いま風邪の何合目かと思いきり

松戸市五香 松沢 貞津(会員)

(推薦者 星野 一恵)

焼芋に舌焼く開戦記念日  
枇杷咲くや母の匂ひの貼り葉  
指先にハーブの匂ひ小鳥来る

ひろば

■市原市文化祭俳句大会

十一月五日、渡辺澄副会長を主選者に招き、第50回市原市文化祭俳句大会を開催した。大会には県内10市から552句、中高生による第8回文芸コンクールでは市内11校から582句の応募があり、当日の席題句会は49人が出席して実施した。(並木邑人記)

☆事前投句の部

- 市原市長賞 コスモスや赤子指より夢に入る 松本 正子
市原市俳句協会賞 煙茸踏んで直感くるひだす 井原 美鳥
市議会議長賞 語り合う人そばにいる良夜かな 岡崎 武
教育長賞 人ごとのやうに過ぎして敬老日 佐々木結花
文化祭実行委員長賞 書き足らぬ思いの隙間つづれさせ 馬淵 津枝
☆文芸コンクール／俳句の部
市原市長賞 姉崎東中2年 横山 瑞菜
浴衣着ていつもと違う歩き方
市原市長賞 市原緑高2年 夢田日南子
あと一步届かなかったスイカ割り
市原市俳句協会賞 姉崎東中2年 小串 真斗
妹が庭のアサガオ数えてる
市原市俳句協会賞 鶴舞桜が丘高1年 川崎 優花
似てますね飛べないホタルとこの想い

■千葉・県民芸術祭第58回千葉県俳句大会

千葉県俳句作家協会主催で十月十六日(日)、千葉県文化会館にて開催された。当日はジュニアの部の表彰も加わり参加者百八十名の盛大な俳句大会となった。(石井紀美子記)

◆事前投句の部(雑詠)

- 千葉県知事賞 沖へみな足を投げ出す砂日傘 昼間たつお
千葉県議会議長賞 洗はれて大根太くなりけり 菅谷たけし
千葉県教育長賞 滝の音聞こえてよりの男坂 広上 あい
千葉県俳句作家協会賞 炎昼や轍の中にある轍 美濃 律子
千葉日報社賞 一声が土管の太さ牛蛙 石井紀美子
千葉市観光協会賞 初産へ手話のごとくに毛糸編む 奥村 利夫
優 秀 賞 鳥になるまでふらごを漕いでをり 保坂 和郷
稲刈って柵田百枚解き放つ 椿 良松
地にマグマ沖に潮鳴り燕来る 三苦 知夫
雪明り入れて柩を閉ぢにけり 安部由美子
秀 逸 賞 夕立晴硝子細工のやうな街 遠藤 爽介
決心のうしろ明るき夏木立 森 孝子
人生の第五楽章日向ぼこ 楠原 幹子
稲田や余生のごとく吹かれをり 大山 茂
万緑の底なる隠れ耶蘇の里 大海かほる
葺替へて音のすがしき水車小屋 大久保文夫
墨痕のかすれを涼と呼びにけり 林 ゆみ
北斎の波サーファーを鷺掴み 長濱 聰子

洞窟にのこる声あり沖縄忌 井上けい子
夕顔や農夫貧しき詩を愛す 郡 香織
パリ祭すずらん通りに馬車の音 小原清江

◆席題の部 席題「秋の声」「椋鳥」

【招待選者詠】

むくどりや梯子運んでるところ 鈴木 節子
秋の声土塁の跡に城の戸に 増田 善昭
挽歌ならん昭和平成秋の声 山崎 聰

【招待選者特選句】

鈴木節子特選 秋声やあなたの裏の淋しさよ 石井紀美子
増田善昭特選 秋の声聴かまく人は黙すべく 三枝かずを
山崎 聰特選 むくどりや梯子運んでるところ 鈴木 節子

【特別賞受賞者代表句一句】

千葉県市長賞 椋鳥や空に投網を投げしごと 斉藤すず子
千葉市議会議長賞 椋鳥の鳴き尽くしたる後の闇 椿 良松
千葉市教育長賞 熟るもの日に日に濃ゆしむくの群 中島悠美子
千葉市文化連盟会長賞 椋鳥の群れては夕日沈めをり 中村 世都
千葉テレビ放送賞 振り向けばだあれもゐない秋の声 石橋みちこ
【六位く十位入賞者代表句一句】
⑥水底に藻の長々と秋の声 岡本 秀子
⑦彫像の碑文のうすれ秋の声 三苦 知夫
⑧やさしさは黙にもありて秋の声 茶谷 静子
⑨からつばの樹と椋鳥の群るる樹と 増成 栗人
⑩椋鳥の万の呪縛を解かれけり 槇山 賢三

《会員・会友の近況》

・故原子公平主宰「風濤」誌の編集を、公平の生前から没後十年間にわたり担当してきましたが、昨年未刊行の四四四号を以て終巻といたしました。孤軍奮闘の状況でしたので、ようやく肩の荷を下ろした思いであります。  
(北村 妍二)

・一月に「腰部脊柱管狭窄症」が発症。一時期、歩行困難となりましたが、痛み止めを服薬し持ちこたえています。ところが先月突然、今度は痛風を発症。一週間寝たきり状態が続き、痛みの激しさを、いやという程経験しました。現在は、野菜主体の食事と禁酒の状態です。  
(椎名 鳳人)

・何時の間にか「死なない病気にかかってしまった」と言っていた母の九十歳を超えた。大戦に囚らさずも(?)生き残り、今未知の日々に時に消沈し昂揚して居ります。  
(佐久間眞城)

・句材に悩む日々ですが、四季折々や人の心、暮しの中の閃きを大切にしております。出来るだけスリムにリズムミカルに:(金澤 恵子)  
・昨春秋、大阪府豊中市より子供達の住む当地へ移って参りました。私達夫婦にとつて初めての引越でしたが、環境の変化にも拘らず健康で過ごせているのは、人との交流と少し頭を使って俳句を続けていることではないかと嬉しく思っています。(口村 洋子)  
・「現代俳句千葉」などいろいろの俳誌で多くの俳人の作品を拝見し勉強しています。老化防止に役に立っています。(國分 三徳)

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 明石春潮子
- 入会 (会員) 河合利枝
- 移転 (会員) 三浦 侃 (野田市末新町へ地区内移転)

《平成二十八年第三回幹事会》

日時 平成二十八年八月三十日(火)  
午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、第一二二号会報について
- 二、平成二十八年度秋の吟行会について
- 三、現代俳句協会(本部)の動向について
- 四、関東甲信越静ブロック連絡会議報告
- 五、多摩地区俳句大会報告
- 六、平成二十九年総会・俳句大会について
- 七、各研究句会の状況について
- 八、十一月幹事会の日程について
- 九、その他 ①会員・会友の入退会状況 ②その他

《平成二十八年第四回幹事会》

日時 平成二十八年十一月二十二日(火)  
午後四時三十分より

場所 三井ガーデンホテル千葉

議題

- 一、平成二十九年俳句大会・作品募集について
- 二、第一二三号会報について
- 三、秋の吟行会報告
- 四、平成二十八年度ミニ吟行会について
- 五、平成二十九年春の吟行会について

- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
- 七、各研究句会の状況について
- 八、その他 ①会員・会友の入退会状況 ②次回幹事会その他

事務局・編集部だより

●秋の吟行会は、大勢の皆さんに参加いただき、大盛会でした。企画部、事業部はじめお世話下さった皆様お疲れ様でした。

●今年の最終号をお届けします。来年へ向けてのお知らせへ俳句大会作品募集へ新春ミニ吟行会へ私の感銘句募集を掲載していきますので奮ってご参加下さい。

●「ひろば」のコーナーで各地区の俳壇の活動を幅広く紹介していきたいと思っております。俳句大会等のニュースを編集部までお寄せください。

<p>現代俳句千葉 第一二三号 平成二十八年十二月一日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 現代俳句千葉編集部 〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五-六-一六〇二 徳吉洋二郎</p> <p>会長 秋尾 敏</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒278-0043 野田市清水五二七-一〇 高橋 宗史</p> <p>TEL・FAX 〇四一七一二五-三三八二</p>
---------------------------------------	---